

〔学術論文〕

中国人就学生追跡調査に見る日本語と日本人観の変化 —中国人学生の語りと面接質問紙調査から—

Chinese Pre-college Students' Ability of the Japanese Language and
their Image of the Japanese People : How They Have Changed?

山田陽子
Yoko Yamada

要旨 本稿は、前回実施した中国人就学生（日本語学校生）に対する聞き取り調査の1年後に、前回調査と同じ学生の中から追跡調査が可能な学生（現在、大学生）に対して再び聞き取り調査を実施し、滞日期間の長期化と生活・日本語・日本人観との関係性を検討するものである。

本研究調査の結果、日本語能力や日本人観、心身健康状態、日本の大学への期待感、日本での生活不満度等の点において、1年前の調査結果と比べ、大きく変化していることが明らかになった。それらを規定する要因を分析し考察した。

キーワード：中国人就学生、留学生、日本語学校、日本語、日本人観

はじめに

法務省が2007年末に調べた外国人登録者数は2,152,973人で、国別では中国が最も多く606,889人にのぼり全体の28.2パーセントを占める。在留資格別外国人登録者数において、留学生数は132,460名、就学生数は38,130名である。日本で学ぶ外国人留学生のなかで最も多数を占めるのが中国人留学生であり、全留学生の6割を占めている。

2007年5月の日本学生支援機構の調査では、中国出身の留学生数は71,277人で、その内大学生は39,862人、大学院生は16,264人、短期大学生は1,466名となっている。

筆者は、名古屋市居住の中国人就学生（日本語学校生）62名への参与観察および面接質問紙調査・聞き取り調査から、かれらの生活と日本語習得における課題を検討してきた¹⁾。

本稿は、前回実施した中国人就学生（日本語学校生）聞き取り調査から1年経過後に、前回調査と同じ学生の中から追跡調査が可能な10名（現在大学1年の留学生）に再び聞き取り調査を実施し、滞日期間の長期化と生活・日本語・日本人観との関係を考察するものである。最初に第1節で、ひとりの中国人学生の語りを取り上げ1年間にどのような変化が生じたのか検討する。第

2節では、面接質問紙と聞き取り調査から浮かび上がった中国人就学生追跡調査結果を提示し第3節で考察のまとめを行う。

第1節 生活の変化—中国人留学生の語りから

前回の調査から1年が経過した。日本語学校生は大学へ進学したことに伴い在留資格が「就学」から「留学」に変わった。そのため就学生ではなく留学生と呼ばれるようになった。追跡調査した学生のひとりから聞き取り調査で得られたデータをもとに1年間の生活面・日本語学習面等の変化を考察する。語りをフィールドノーツに記録し文字化したものを整理してまとめた。〈 〉は、筆者の質問を表わす。

聞き取り調査日と聞き取り時間：2009年1月3日(合計4時間)

聞き取り方法：インフォーマル・インタビュー法、フィールド・ノーツに記録

調査対象者プロフィール：中国人、大学1年生、23歳(女性)、渡日期間2年半

中国東北地域出身、日本語能力試験1級合格

使用言語：日本語

(1) 日本語能力の変化

〈大学に入って8カ月経ちましたが、日本語能力の面で変わったと思いますか?〉

新聞の読み方が今でもよくわからない。漢字の読み方が幾通りもあって、難しい。読み方はよくわからないが、意味は大体わかる。あとは、送り仮名の難しさ。たとえば「行」という漢字は、「行く」と「行なう」(行う)など読み方も違うし、意味も違うでしょ。「おこなう」という読み方の場合、送り仮名が「なう」と「う」の2種類あって難しい。大学では、日本語学校と違って、自分の発言が少なく、ほとんど先生の講義をじっと聞いている。だから会話はあまり上達していないけれど、講義の内容をよく聞くことで、内容がよくわかるようになった。日本語学校のとときは「聴解」がまったくできなかったけれど、大学に入ってから聴解能力が向上したと思う。だから、今は「聴解」は簡単に思えて、「会話」が難しく思える。最近受けた日本語能力1級試験では、「聴解」がものすごくよくできた。うそみたいによく聞き取れた。日本語学校のとときは「聴解」テープが速く思えて、まったく聞き取れず、困っていた。今は大学の講義でいつも先生の話をよく聞いているから「聴解」がよくなったのだと思う。日本語学校のとときと全く逆になった。今は「聴解」より「会話」のほうが難しく感じています。テレビ番組は、下に文字が出ればわかるでしょ。でも、日本人が興奮して、キャーキャー話すと聞き取れない。逆に、私は日本人のように興奮し

てキヤーキヤーと高い声出して、日本語を話すことができない。いつも落ち着いた話し方になる。

大学の講義では、長い文章を速く読まないといけないので集中力が必要になる。「読解」が今、一番難しいと思う。講義を聞くだけでは、日本語が上手にならないので、講義中に先生が使用する単語も教えてほしい。それからもっと講義の中で日本の文化を教えてほしい。せっかく日本に来たのだから、日本の文化を学んでから帰りたい。先生はことばを明瞭に声に出してほしいし、板書も丁寧にしてほしい。何を話しているのか全然わからない先生もいるし、黒板に書く文字がぐちゃぐちゃで何を書いたのか全然わからない先生もいる。私たち留学生に対してはもっと努力してほしいと思う。じっと講義を真剣に聞いていてもわからないので、ものすごく疲れる。私たち留学生は、教室の一番前にすわって、先生の口元を見ながら真剣に聞く。日本人学生は教室の一番うしろの方に座っている。眠っている学生もいる。まじめに私たちは聞いています。だから私たちのこと、もっとわかってほしいんです。

<大学に入学して初めての期末試験は、いかがでしたか？>

めちゃくちゃ難しかった。もう全くわからなかった。私たち留学生のことを考えて出題してほしいです。いきなりでは何も答えられないです。試験の前に出題される問題の語彙や表現などをあらかじめプリントして、試験の前に勉強させてほしいです。あれじゃ、何にも留学生はできないです。日本人の学生にはいいと思うけれど……。もう本当に疲れました。もうショックで……。ものすごいストレスになりました。特に専門科目は何がなんだか全くわかりませんでした。

(2) 日本語学校における日本語教育と大学における日本語教育の相違

<日本語学校のときと大学では、日本語教育の方法は違いますか？>

全く違う。日本語学校はテキスト中心で、文法をしっかりと教え、毎日決まったカリキュラムのもとで学ぶ。学生ひとりひとりに厳しく指導し、日常生活で就学生が困らないような対応をとっている。大学では、指導よりも監督に重点が置かれているように思う。授業についてこれない学生は放任される。また週に2回しか日本語の授業がないので、あまり日本語の勉強にはならない。どちらかという、プリントをもとに文章読解力中心の学習になる。たとえば、私が取ってる日本語の授業では、日常のニュースを題材に、先生がプリントを作成して、そこに内容を問う質問が書かれている。最後にこのプリント教材を読

んで、感じたことや考えたことをレポートのテーマとして出題される。それを私たちは書いて大学に持ってくるんです。

(3) 留学目的

<あなたの当初の留学目的は達成できそうですか？>

日本に来て大学に入学できたので半分達成した。大学卒業後、日本の会社で就職することが大切だと考えている。あるいは、中国で日系企業に就職すること。中国で大学に行っていたのを途中でやめて日本に来たので、きちんと日本で大学の学位を取得したいと思っている。日本の大学に入学して期待通りでよかった。就学生の頃と比べて心が成長したと感じている。子どもから大人になった気がする。日本語学校時代はアルバイトで苦勞した。今は日本人の友人ができたし、ことばが通じるようになったので、電器店に自分で交渉してテレビも直してもらえ、自分の日本語能力に自信がもてるようになった。

日本の大学に望むことは、先生に責任をもって教えてほしいということ。大学に入ってよかったことは、留学生支援センターがあること。困ったときは何でも相談に行く。日本語のこと、保険のこと、就職のこと…何でも相談に乗ってくれる。一番頼りにしている。

(4) ストレス

<ストレスは、就学生のときと比べて、現在はどうか？>

だんぜん大学に入ってからの方が増えた。だから、ストレスがたまると、国の母に電話してたっぷり話をする。パソコン画面で母の顔を見ながら、週に二回電話をしてゆっくり話をする。そうするとほっとできる。母は強い人間で頼りになる。中国では女の人は強いです。特に私の母は強い人です。

<なぜ、留学生になってからの方がストレスを強く感じるのですか？>

やっぱり、大学内ではなかなか中国語でわーわーと話せない。日本語学校では、同じ中国人がいっぱいいたからみんな中国語で思いきり会話して騒いでいた。毎日同じような規則正しい生活をしてたし、友だちや先生とも毎日何時間もいっしょにいた。まるで自分の家にいるような雰囲気だった。今は日本語学校が懐かしいです。毎日にぎやかで盛り上がりお祭りみたいだった。大学は講義を自分で選んで聞くだけだから。毎日友だちと会えないし騒げないし・・・寂しい。

聞き取り対象者全員が大学入学後にストレスを感じていた。ストレスの原因は「学習環境の変化による寂寥感から」、「将来の進路に対する不安感から」、「中国の両親の期待に対する責任感が重くのしかかっているから」の3つに分けることができた。

(5) 定住意思の変化

＜就学生の時と同じように、日本に定住する気持ちはありませんか？＞

変わらない。もともと中国で通訳になるのが夢。だから大学を卒業して少し日本の会社で働いてから中国へ帰りたと思っている。このまま定住する気持ちはない。

(6) 日本人観の変化

＜大学生になってから、日本人に対するイメージは変わりましたか？＞

就学生時代は、あまり日本人のイメージは良くなかった。「冷たい」、「差別する」、「仕事ばかりしている」というイメージをもっていた。今は、少し「信頼できる」けれど、あまり働かない「怠け者」というイメージがある。これまでは真に相手の日本人が「いい人」なのかどうなのか見抜く力がなかった。日本人は「本音と建前の人」というイメージがあったでしょ。また、すぐに私のことを見て、「あっ、中国人」という。人間を、すぐ国ごとに選別して先入観をもって話す傾向があるでしょ。留学生になると、大学の先生のイメージが日本人のイメージになっていった。大学の先生が皆「いい人」だから、今は日本人のイメージがかなり良くなっている。日本人の生活を見ていると、「日本人も結構大変だな」とわかってきた。今は日本人に同情しているんです。

このように日本語学校生から大学生へと環境が著しく変化したことが、日本人観に影響をおよぼしている。日本人に対するイメージの変化は、日本での生活体験の増大による日本人観察の余裕ができたことと社会的ネットワークの拡大、とりわけ大学教員との接触が開始されたことに起因する。調査対象者の通う大学には、「留学生支援センター」という大学教員・職員の支援組織がある。また大学教員個々人の留学生に対する心暖かい接遇により、日本人観の好転に繋がっていることが確認された。

第2節 中国人就学生10名の追跡調査

(1) 進学

前回調査した中国人就学生62名の進学先は、専門学校3名、短期大学1名、大学50名、大学院

4名、研究生2名、その他大学不受験2名(帰国1名、結婚1名)である。専門学校に進学した学生の専攻は全て「服飾デザイン」が占め、短期大学・大学・大学院進学者の専攻は「経営・経済」が大半を占めるのが特徴である。

(2) 日本語と日本人観、社会的ネットワーク(日本の友人)

追跡調査した10名全てが現在は大学生となっている。日本語観と日本人のイメージ、社会的ネットワークの変化を表1にまとめた。選択肢を設け該当する番号に○をつけてもらう方式をとった。日本語学校生の時には「日本人の友人がいない」と9名が回答していた。1年後の追跡調査では「大学生になってから日本人の友人が新たにできた」と回答する学生が5名になり社会的ネットワークの拡大が確認された。表1からわかるように、留学生(大学生)になってから「聴解」の困難は解消した代わりに「読解」と「作文」に困難を感じている。大学生になってからは、日本人教員の生の声に触れ、講義内容に関する質問や教員のフィードバックを通して双方向的学習の機会が増大したことから「聴解」能力が向上したと考えられる。また大学生では長文の内容把握、レポート作成、論文作成能力を求められるようになる。内容を的確に読みとることや速く書かなければならなくなったことに「読解」と「作文」の困難は起因していると考えられる。つまり日本語学校生と大学生とでは求められる日本語能力が異なってきたのである。

一方、日本人観は5名(B子、D男、E子、F男、H子)が悪化傾向を示した。また日本人は「差別する」という見方が1年前には4名であったのが5名に増えている。アルバイト先での日本人との賃金格差、深夜労働や3K職場への配置などを差別的と受け取っている。また1年前には1名しか抱いていなかった「怠け者」というイメージが、2名に増えた。「男女不平等」は3名で変わらない。これとは逆に日本人のイメージが好転した学生もいる。「やさしい」というイメージを抱いていた者は3名から、1年後には4名に増えている。A子の回答にあるように「信頼できる」が加わったこと、G男の日本人観が「冷たい」、「不親切」から「礼儀正しい」、「やさしい」に、またI子が「冷たい」、「話しにくい」、「差別する」から「話しやすい」、「親切」、「やさしい」に、J子の回答から「差別する」、「男女不平等」がなくなり「親切」、「信頼できる」に変化したことである。これらは、留学経験による異文化接触の結果と考えることができる。すなわち、かれらが一日の内で最も多くの時間を費やすアルバイト先の上司・同僚や日本人客、新しく接触が始まった大学教員・職員・日本人の友人との個人的な生活体験に基づく日本人観といえる。滞り期間の長期化に伴い、10名の日本語観・日本人観の変化が認められた。

表1 追跡調査による中国人就学生の日本語・日本人観の変化(1年後)

前回調査2008年2月(表1では「前」と書いてある)

今回調査2009年2月(表1では「後」と書いてある)

		日本語観	日本人のイメージ	日本人の友人
A子	前	聴解に困難	差別する・冷たい	いない
	後	読解に困難	差別する・冷たい・仕事ばかりしている 怠け者・信頼できる	いる
B子	前	聴解に困難	やさしい	いない
	後	作文に困難	話しにくい	いない
C子	前	聴解に困難	暖かい・話しやすい・親切・差別しない 礼儀正しい・怠け者・男女不平等	いない
	後	読解に困難	暖かい・話しやすい・親切差別しない	いない
D男	前	聴解に困難	差別しない・信頼できる・やさしい	いない
	後	読解に困難	冷たい・差別する・仕事ばかりしている	いる
E子	前	聴解に困難	男女不平等・やさしくない 冷たい・話しにくい・差別する・怠け者	いない
	後	作文に困難	冷たい・話しにくい・差別する	いる
F男	前	聴解に困難	怠け者・男女不平等・親切	いる
	後	作文に困難	差別する	いる
G男	前	聴解に困難	冷たい・不親切・家族を大事にする	いない
	後	作文に困難	礼儀正しい・やさしい	いない
H子	前	聴解に困難	親切・礼儀正しい	いない
	後	作文に困難	親切・礼儀正しい・家族を大事にしない	いない
I子	前	聴解に困難	冷たい・話しにくい・差別する・礼儀正しい 仕事ばかりしている・男女不平等	いない
	後	作文に困難	話しやすい・親切・礼儀正しい・慎重 仕事ばかりしている・男女不平等・やさしい	いる
J子	前	聴解に困難	差別する・礼儀正しい・男女不平等・やさしい	いない
	後	作文に困難	親切・信頼できる・礼儀正しい・やさしい	いる

(3) 定住意思

就学生(日本語学校生)から1年後に留学生(大学生)となり、生活環境が変わったことによって日本への定住意思に変化はあるのだろうか。

表2 定住意思

	前(人)	1年後(人)
就職して何年か経ったら国に帰る	8	7
日本に永住する	1	2
未定	1	1
合計	10	10

日本への定住意思に関しては8名が1年前と同じ回答をしており、1名のみ変化が認められた。1年前は「大学卒業後2～3年働いたら中国に帰る」という回答をしていた学生(男性)が今回の調査では「日本に永住する」と回答している。それは日本永住を選択した中国人友人の影響を受けた結果であり、単独での永住を希望するものではない。

1年の間に、日本への定住意思に大きな変化は認められず、冒頭で語りを取り上げた学生(23歳、女性)と同様の結果が表れた。日本での留学年数をあらかじめ中国の両親と相談し明確に決めてから来日する学生の多いことが認められた。

(4) 心的ストレスと健康状態の変化

<あなたは、1年前の日本語学校生のときと大学生になった現在とでは、どちらがストレスを強く感じていますか?>

表3 心的ストレス

留学生(大学生)になってからの方が強く感じる	10
就学生(日本語学校生)のときの方がストレスを強く感じた	0
合計10(人)	

心的ストレスに関しては、10名全員が日本語学校生のときより現在の方がストレスを強く感じている。この内、1名はストレスが原因で入院中であった。身体の健康に関しては、どうだろうか。

表4 健康状態

就学生のときと比べて今の方が良い	1
変わらない	6
就学生のときと比べて今の方が悪い	3
合計	10(人)

表4のとおり、大学生になった現在の方が健康状態の悪い学生が3名おり、就学生時代と健康状態が「変わらない」と回答した学生を含めると大半が健康状態は悪いか変わらないかのどちらかである。1週間のアルバイトの時間数は減少しているにもかかわらず（聞き取りより）、大学生になってからの方が健康状態の悪化傾向が見られる学生は、3人に1人存在する結果となった。「今の方が良い」と回答する学生は1名のみである。この大学生の健康状態の好転は、日本語能力が向上し日本での生活に自信がもてるようになったこと、日本人の友人ができたことの二つが大きな要因であった。就学生時代には、社会的ネットワークが欠如しており困ったことがあっても誰にも相談しないと回答していた。聞き取りからわかったことは、大学生活において日本人の友人ができたことや留学生支援センターの組織的な支援を受けることができるようになったことなど社会的ネットワークの拡大が健康状態に関係していることである。

ストレスを抱える学生の増加に関しては、次の要因が考えられる。中国の家族と離れて単身生活を送ることにより食事の簡素化傾向と寂寥感からのストレスが原因による体調不良である。就学生時代には同国の学生と日本語学校でアットホームな雰囲気生活しており勉強の忙しさはあったものの、ストレスは現在ほど強くは感じてはいなかったことが聞き取り調査（23歳、女性に代表される）から明らかになった。大学生になると大学の講義を自ら選択することが可能で自由時間は増えたものの、中国人の友人たちと中国語で話す機会は極端に減少した。ストレス発散機会の確保が困難な状態の慢性的長期化により健康不良に至っていると考えられる。学生数の急激な増加もかれらのストレスを増大させている。日本語学校では1教師が1クラス20名以下の学生を担当しており名前も顔も出身地も把握している。大学の中には日本語学校の何倍もの人数で1クラスが成り立つ大規模なクラス運営がなされるところも多い。冒頭で取り上げた大学生（23歳、女性）のように、日本での生活体験の増大により生活言語には自信をもてるようになったが、大学入学後の専門科目受講や期末試験に必要な学習言語には自信をなくす傾向が示された。

(5) 日本への留学

<あなたは、日本の大学をあなたの国の友人に勧めますか？>

表5 日本留学

勧める	5
勧めない	5
合計	10 (人)

「日本への留学を勧める」と回答した学生は、10人のうち半分で、勧める理由を「日本では働きながら自力で大学へ行けるから」と述べている。「ほかの国ではアルバイトのできる職場が見つからない」と答える。また反対に、「日本への留学を勧めない」と回答した留学生は「日本で生活

することは、言語と生活費の問題で大変だから」と述べている。生活面での大変さのほかに、もうひとつの理由を「大学への期待が失望に変化した」ことをあげる。大学卒業後の就職に対する期待がもてないことを最大の理由としている。

聞き取り対象者の中には、日本の大学卒業後、西欧諸国(フランス、ドイツ等)の大学院進学を目指す学生や日本の大学院で修士学位取得後に西欧の大学院で博士号取得を目指す学生の存在がある。これらの学生は、日本の高等教育機関には将来性において期待感がもてないという理由をあげる。さらに中国の両親の意見が反映されていることもわかった。かれらの両親は、子どもに日本の学位ではなくフランスかドイツの学位を取得するように助言していた。両親は日本より西欧諸国の学位に、より高い価値を見出している。日本とそれほど生活格差が目立たなくなってきた都市部の中国人は、アジアよりも西欧においてさらなる高キャリア獲得へと移動する傾向が見られる。2004年に中国からの留学先として最も多かったのはアメリカで、ついで日本、イギリス、オーストラリア、ドイツの順であった(杉村、15)ことから考えると、近年はアメリカ・アジアから西欧へと移動の方向性が変化してきたといえる。このように本稿における聞き取り調査から、子どもに対してより一層の高キャリアを希求する中国人留学生の家族像が浮き彫りになった。しかしながら、日本への就学指向が依然として高いのは、先述のように西欧への就学希望はあるものの、アルバイトで自活しながらの勉学は困難である。それが可能なのは日本しかないから、便宜上来日している就学生・留学生が多いことを示している。もうひとつの理由は、日本が中国と同じ漢字文化圏だからである。中国人にとっての漢字文化圏への就学は、非漢字圏に比べ勉学に有利であるという理由からプル要因となっている。

(6) 日本での生活に対する不満

留学生は日本での生活に対して表6のように様々な点で不満を感じている。これらの不満は前回調査(日本語学校生のとき)にはなかったものが多い。たとえば、日本経済への不満、大学の授業内容、日本の習慣の項目などである。滞日期間の長期化により不満の種類が増加するだけでなく、それぞれの不満度が高まっていることが聞き取り調査から確認されている。

表6 日本での生活不満項目

日本での生活費の高さに不満	大学の授業内容に不満
日本人の考え方に不満	日本の新聞記事に見る中国観に不満
日本の習慣に不満	中国人に対する日本人の態度に不満
日本経済に不満	アルバイト先の日本人上司の態度に不満

(7) 将来の夢

本調査の結果、日本語学校生のときに描いた夢と大学生になってからの夢とは、表7のように

ほとんど変化しないことがわかった。D男の場合、将来の夢が「日本語教師」から「情報関連企業への就職」に変化し、G男が「教師」から「会社社長」へと変化しているのみで、ほかの8名は1年経過後も変化がない。8名は「将来の夢」に対する期待感を1年後も維持していることが確認された。

表7 将来の夢

	日本語学校生のときに描いた夢	大学生になってから描いている夢
A子	中国で外国語学校を作る	通訳になる
B子	店の経営者	店の経営者
C子	日系企業の社員	日系企業の社員
D男	日本語教師	情報関連企業の社員
E子	通訳	通訳
F男	薬剤師	薬剤師
G男	教師	会社社長
H子	ない	ない
I子	教師(美術)	教師(美術)
J子	法律家	法律家

第3節 まとめ

中国人学生は、滞日期間の長期化とともに生活言語能力は高くなるが、大学教育に必要な学習言語能力（たとえば専門科目や期末テスト問題の語彙知識）に自信を喪失するとともに、心的ストレスが強くなっている。日本語観では、1年前に最も簡単な科目が「会話」で最も困難を感じている科目は「聴解」であったのが、最も簡単な科目が「聴解」となり、最も困難を感じている科目が「読解」と「作文」というように、全く異なる結果を示すことが明らかになった。外国人としての日本語教育受講者であった日本語学校生から日本人とともに学ぶ大学講義受講者へと教育の質・方法・日本語学習時間数の変化が日本語観の変化に繋がっている。就学生の時は日本の大学受験を目指す進学予備教育としての日本語教育に終始し、学問的・体系的な勉強はしてこなかった。ところが大学進学後は、日本人と中国人とその他外国人が同じクラス内で個々人が選択するカリキュラムのもとに多くの大学教員から専門講義を受けることになる。日本語教育に関しては、日本語学校時代には1週間に20限（1限50分）あった日本語の授業がわずか1限90分（調査対象者の大学）へと10分の1に減少している。本調査から、大学での専門講義や期末試験に対応できる日本語能力を身につけるための橋渡し教育（日本語学校から大学へと繋がる）の必要性が確認で

きた。大学を合格した就学生には日本語学校卒業までに大学学部の専門講義に適合する本の読解、小論文作成のための「書く」力の養成を中心に日本語教育を行なう大学予備教育が望まれる。

大学では同じ教室内で日本人大学生との異文化接触が始まる。日本語学校生のときと大学生になってからでは生活や日本語・日本人観に大きな変化が見られ、それらに影響を与えている要因は、日本人との異文化接触、大学の教育、留学生支援組織、生活体験、社会的ネットワークである。滞日期間の長期化による異文化接触機会の増大は、必ずしも日本人観に影響を及ぼすとは限らない。日本人観は滞日期間の長期化により好転あるいは悪化するわけではなく、学生個々人の生活体験によるものであることが確認された。しかしながら、中国人就・留学生に対する本研究調査は対象者が限られた人数であること、聞き取りが十分とはいえないことなどから、調査結果を短絡的に分析せず、より多くの学生に綿密な聞き取り調査を行なうことが必要である。そうすることで、外国人全般にわたる言語教育に貢献できる確かな資料を提供することを今後の課題としたい。

注

¹⁾ 調査内容は山田陽子(2008)「中国人就学生の生活世界と日本語教育—名古屋市の就学生を事例に—」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』10号、pp.263-275を参照されたい。

【参考文献】

- 山田陽子(2009)「中国人就学生の生活世界と日本語教育—名古屋市の就学生を事例に—」『人間文化研究』No.10、pp.263-275、名古屋市立大学大学院人間文化研究科
- 山田陽子(2008)「中国帰国子女と中国人就学生—地域支援と日本語習得」第1回移民政策学会研究集会抄録 pp.1-2、移民政策学会
- 山田陽子(2008)「村ぐるみの日本語教育」『2008年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.202-203、日本語教育学会

【ネット検索】

独立行政法人日本学生支援機構

http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data07.html 2009年1月12日アクセス

法務省入国管理局広報2008年6月

<http://www.moj.go.jp/PRESS/080601-1> 2009年1月13日アクセス

(研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2009年5月13日付)。